

中世城郭の復原と史料学

服部, 英雄
九州大学大学院比較社会文化研究院

<https://hdl.handle.net/2324/9095>

出版情報 : 遺跡学研究. 4, pp.54-61, 2007-11-23. 日本遺跡学会
バージョン :
権利関係 :

中世城郭の復原と史料学

服部 英雄 (九州大学大学院比較社会文化研究院)

Restoration of a Medieval Castle through Materials Research of the Castle's History

HATTORI Hideo (Kyushu-university)

- 柵 / Fence ● 堀 / Walls ● バリケード / Barricade
- 史料学 / Historical Materials Study ● 復原 / Restoration Works

1. 柵と堀 (板堀)

中世の城は柵の城と考えられているようだ。図示した写真は北九州市立博物館に置かれている豊前国長野城 (北九州市) の模型である (図-1)。攻城のようすが再現されている。攻める側は槍を持って斜面をはい登っている。上からは石を落とす。鉄砲を撃ちかける。下から上に向けての武器は限られる。投石は不可能だし、弓矢であれば届くまい。飛び道具も著しく能力が落ちる。逆にそれらによって上から攻撃されたら、威力は数段に勝るから、苦戦しよう。重力・引力を味方にできれば圧倒的に優位にたつ。だから城は山に築かれる。斜面の途中に土囊で守られた陣所を設けているが、重い土囊を斜面の途中にまであげること自体が、たいへんだった。実際

の戦闘がこういうものだったかどうかは分からない。あまりに攻め手が不利となる。犠牲者ばかりが続く作戦は採れなかつただろう。

長野城の上部の郭 (平場) は柵で囲まれている。長野城の模型は、もうひとつ国立歴史民俗博物館製作のものもあって、現在は北九州市埋蔵文化財室に貸与されている (図-2)。この模型でもやはり上部は柵で囲まれている。発掘調査はなされておらず、遺構は未確認というから、復原は推定復原である。柵なのかもしれないが、この城には大土木工事により作られた堅堀群がある。一方が堅固な堅堀で、一方が簡素な柵では、不調和である。

中世の城の上部が柵で囲まれていたことを示す絵画資料は、たとえば毛利文庫の肥後和仁城 (田中城、熊本県) の攻防を描いた図 (和仁仕寄陣取図、図版



図-1 長野城模型 (北九州市博・図録より引用)



図-2 長野城模型(国立歴史民俗博物館、現在は北九州市埋蔵文化財室展示)

は図録『天下統一と城』国立歴史民俗博物館に所収)がある。本丸は横木をもつ柵で囲まれている。城の山下部も柵があり、遠く城を取り囲んだ攻める側も二重の柵を設けている。だが田中城(和仁城)発掘調査で確認された明瞭な柵列は、クルワの縁にはなく、捨てグルワと呼ばれる高台の中央だった。ほりかたは持たず、上から打ち込まれたもの、ただし底は錐ではなく丸いという。クルワの縁での柵列は未検出であったから、遺構部が崩落したか、わずかな残地部分(未調査地)に残っているかもしれないという発掘担当者の話だった。現在の本丸には柵が多く復原されている。本丸では柵の検出はなく、遺構の表現ではない(三加和町教育委員会『田中城跡』11,12,1997ほか)。

北海道上之國勝山館跡での発掘調査は、もっとも顕著に柵列が検出された事例だ。柵は布堀した上で、そこから30cmほどの深さの穴が等間隔に並ぶ。掘り方はなく、打ち込まれたものであろう。ただし底は鋭利ではないという(復原された柵は二メートル近い大きなもので、打ち込みではなく埋められ、ボルトで接合されている)。二重になった柵、重複した遺構もある。常時あったかのように考えがちだが、柵の寿命が3、4年だとすれば城が存続した100年間で、柵のあった時期はその1倍ないし2倍だから、ごくわずか、短期間だった。臨時・仮設の施設、バリケードということになる。

もしも堀という構造物が、置いただけの根太材の上に建っていれば遺構としては残りにくい。史跡知覧城跡(鹿児島県)では蔵の城や本丸にてクルワ全面の発掘調査が行われたが、縁では柵も堀も検出されなかった。急なシラス斜面を登ってくるものはいないという認識・前提があったのだろうか。

慶長二年(1597)頃作成の『越後国郡図』瀬波郡(東大史料編纂所刊、上掲『天下統一と城』、図-3)に画かれた村上要害には、柵が多用されている。ただし堀もある。柵は平場に置かれたものがある一方、斜面中段のものもある。斜面中段のものについては、その上部に堀があつて、セットである。中心郭に近づくほど、上に行くほど、堀が多い。柵は麓や村の周囲にもある。

柵はよほどに間隔をつめて、横木も2、3本は設けないと人間が入ってくることを阻止はできない。隙間が空いているから、そこから射撃されることを阻止もできない。上端がもし柵ならば、それは、斜面を敵が登ってくることは、まずはないか、あるいは容易に発見できるという前提に立つのだろう。

藤井尚夫『中世の城と合戦・復元イラスト』(朝日新聞社、1995)ではいくつかの復原タイプを考えている。(1)上端部(平場)が柵ばかりのもの、(2)

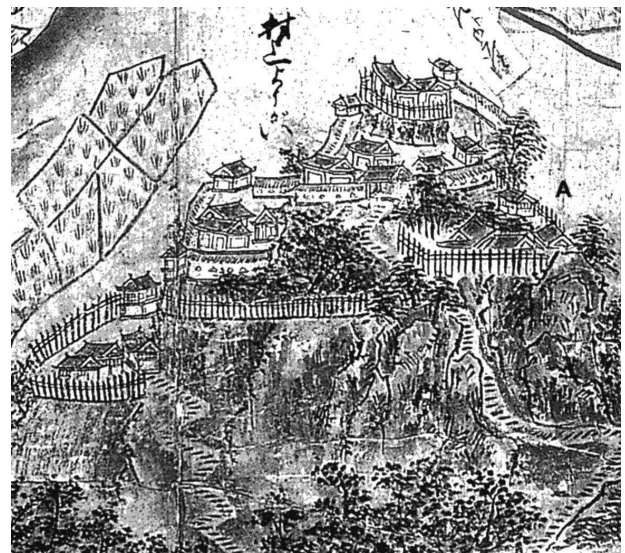


図-3 村上要害の柵と堀(『天下統一と城』より部分引用)



図-4 「戦国合戦図屏風」
 (『図説・戦国合戦図屏風』より部分引用)

柵と塀の連続交互併用のもの、(3) 上端部には塀があって、柵は斜面の途中にあるものなどがある。斜面の途中にあれば、登ってくる攻撃兵には大なる障害になっただろう。村上要害に見る事例と同じで、合理的で、機能的にも理解しやすい。ただし柵よりも下にいる敵兵に石を落とすことはできなかった。柵を越えて攻め登ってこない限り、手出しができなかった。

斜面にバリケードである柵を置き、その上に狭間のある塀を置くことは、「戦国合戦図屏風」(富山県個人蔵、『図説・戦国合戦図屏風』所収、図-4)にも描かれているから、一般的な考え方で、ふつうにみられる防御手法だった。

補助的な柵は攻城図に多く見られる。冬の陣を画いた大坂城屏風(東京国立博物館、江戸後期、図-5)では、門の外や橋の前、塀の下のほり際・土手際に柵がある。縄に鳴子が付けられて、人が触れればすぐさま知ることのできる仕掛けもあった(『戦国合戦絵屏風集成』)。この屏風では柵に使われた木は杉・檜のようなまっすぐな木ではなく、いくぶん曲がった雑木である。しかし先がとがっていれば、上から打ち込むことはできた。

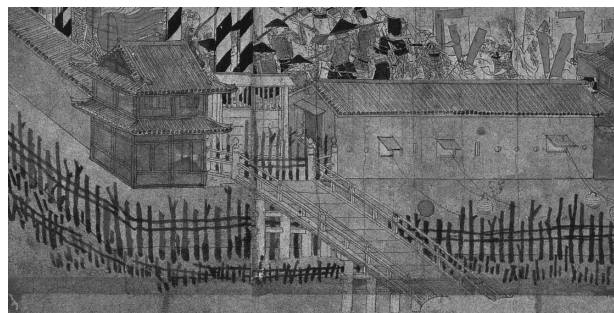


図-5 大坂城冬の陣図屏風
 (『戦国合戦絵屏風集成』4より部分引用)

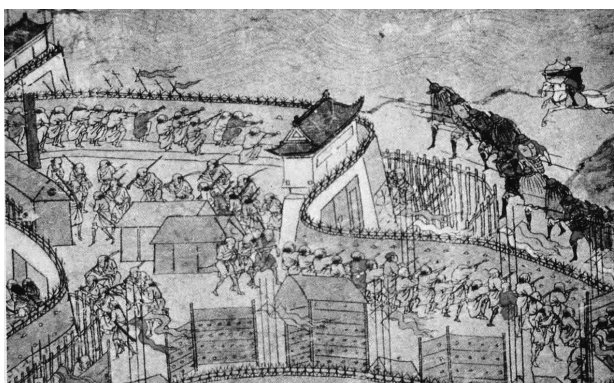


図-6 順天城攻城図(『征倭紀功図巻』)
 『週刊朝日百科 日本の歴史』通巻549より引用



図-7 「蔚山城戦闘図屏風」(大韓民国)
 『国立晋州博物館図録』より部分引用

慶長の役での順天城攻防を画く『征倭紀功図巻』（『倭城の研究』2, 1998）では、城の壁面の一回り外側に柵が設けられて、敵の接近を防いでいる。とくに城門のまわりには厳重な柵がある。みなバリケードである（図-6）。蔚山城の攻防を画く「朝鮮軍陣図屏風」があり、鍋島報効会所蔵のものが知られているが、明治期の写本である。ただし元本は鍋島直茂が従軍絵師に画かせたものといい、まったく同じ構図だが、色調を異にする屏風が坂本五郎コレクション（韓国国立晋州博物館図録所収、「蔚山城戦闘図屏風」として収録、図-7はその一部）ほかにある。蔚山城では、いちばんの外周は柵でその内側に塀がある。その組み合わせで外側の最先端防備としていた。この記述は浅野家文書・高麗陣雑事覚書（大日本古文書・256）中の「蔚山之御城出来仕目録」の

惣構芝手土手高さ四尺八寸（五尺に訂正）
 一土手 千百四間半 中国衆
 一塀 千百四間半 中国衆
 まきおゝい、やきり有
 惣構
 一柵 千式百五拾間 同

という記事におよそは合致する。この屏風が後世の絵画だとしても、合戦に参加した人物の記録・記憶を反映していると考えられ、リアルである。

重要な施設で直接の破壊攻撃に弱い箇所には、敵を近づけないように柵を設けた。すなわち走ってくる敵の勢いを止めることが役割だった。馬は停まり、鎧をまとった兵はとまどい、中には入れない。停止する敵を側面から射撃すればよかった。これらでは柵はいずれも補助的な役割だった。バリケードであって構造物だが建築物ではない。

柵を最終防備のかまえとする事例は案外に少ない。『一遍聖絵』に画かれた鎌倉時代の筑前国武士館は堀を持ち、前面は板塀になっている。防備を重視するのであれば、隙間の多い柵よりは、板塀にした。

合戦の実際を記した文献資料に登場するものは、

ほとんど塀である。永禄十二（1569）年、大友氏による毛利方筑前国立花山城攻めの記録がある。立花山は標高367メートルの山城である。

一 五月五日、豊後衆^(陣)陳付、其ま、此方惣陳へ切懸候、前かとより御陳所、塀・尺を御こしらへ、岸を切、ほりを掘、御普請之儀付候付而、御し^(押)のけ候（「森脇覚書」）

ほかの記述（「吉川家先祖勲功覚書」）では「惣陣八面々ニ芝築、塀、櫓ヲ付」とあって、柵はあったが、その前提に塀が存在していたことは確実である（『大宰府太宰府天満宮史料』所収）。

時代は下るが、筑紫文書・筑紫良泰由緒書（『佐賀県史料集成』28）も城攻めのようにすを当事者自身が回想した貴重な記録だ。落とされた城は筑前国那珂郡一の岳城で、標高696メートルもある山岳地帯の城である。

卯の刻（朝六時）に攻めかかった。城中には鉄砲が多く、手負いも出たが、みな塀にとりつき、本丸には我ら（筑紫良泰）が一番乗りした。（守将）坂田蔵人は我らの槍にて討ち果たされた。

攻防は天正14年（1586）だからまもなく天下統一という時期だった。この高山にある山城は柵ではなく、やはり塀（「屏」とある）である。

柵は設置された位置によって役割が異なっている。もしもそこにまで敵が到達し、鉄砲を射掛けられたりしたならば、至近距離からの攻撃となるから防御能力は低いものだった。



図-8 小倉城宮本伊織邸跡周辺発掘スナップ

図-8は小倉城・宮本伊織邸跡発掘調査を見学した際の遺構スナップ写真である。区画と思われる溝に面した穴は、連続していない。柵ではなく簡素な塀であったと考えた。ところがこの右手にも遺構が続いていて、そこでは穴が連続しており、柵のように見える。板塀も位置を変えて何回か更新されれば、あたかも柵のように見えてくるのではなかろうか。

史跡宇土城跡（熊本県）では、千畳敷と呼ばれる頂部に至る通路のなかに本丸門が板扉で復原された。その登路の両側上端（千畳敷平面）には柵が復原された。柵の跡と考えられる柱穴列が連続していたからである。決め手となったのは、この柵状の遺構だった。しかし通路から至近距離にある。門は強固な構造だから、簡素にすぎる柵との取り合わせには違和感も残る。何回かに更新されて、遺構が重複すれば、塀の遺構であっても柵のように見えることもある。いまひとつの案として柵ではなく塀という考えもありえたと思う。機能的には塀のほうがマッチしていないか（筆者は宇土城跡整備委員会に参加しており、責任者である）。

本格的な柵の事例は秋田県・払田柵である。間隔なく木材が打ち込まれ、堅固である。ただし平地であった。

メリットとデメリットがある。塀よりは柵のほうが外側を見やすいし、気づきやすい。小規模なものなら安価で造作も迅速にできた。塀よりも柵の方が、柱数が多いだろうから、頑丈であった。投石は隙間のある柵の方が、塀よりは楽である。万全の防御ではないが、長所があった。

設置された場所、時間、状況、機能によって柵か塀かが選択された。概していえば、柵は緊急対応である。恒久施設というよりは臨時のバリケードで、多くは補助的役割だった。

復原は年度事業だから限られた期間内の仕事になる。図面だけでは気づかないことが多い。シミュレーションもほとんどなされない。チェックは完璧には機能しえない。いわゆる「あと知恵」が多くなる。現代人、500年も後世の人間が考える復原構造物な

ど、限界のあるものだ。実際にはさまざまな復原案があって、妥当な根拠を持つ他の案もあることを説明する必要がある。

2. 堅堀と障子堀（非連続）

中世の城郭遺構にはよくみられるが、近世の城郭にはほとんど見られない遺構がある。たとえば堅堀とか障子堀である。中世の城を考える場合、こうした遺構の持つ意味を考えることが、その本質を考える上で大きな手がかりになる。

堅堀や障子堀は、かつては地域的な分布とされていた。堅堀は越後に多く、障子堀は後北条氏の城に特有とされていた。しかし各県ごとの中世城館分布調査など遺構の実態把握が進むにつれ、全国にあまねく分布していることも明らかになった。

前者の堅堀は、福岡県では63の城跡で検出された（中村修身「福岡県下の畝状堅堀群を持つ城郭」『北部九州中近世城郭』13,平成19年・2007,なお小石原・松尾城を加える）。斜面全面における堅堀の多用は、北九州市長野城に代表され、圧巻である。大分県分布調査でも豊後（北部）・豊前に普遍的に分布することが確認された（大分県教育委員会『大分の中世城館』2002～2004）。

いっぽうの障子堀は北九州市小倉城三の丸や熊本県宇土城千畳敷下でも確認された。堅堀も障子堀も敵兵の移動を大きく制約する意味があったと考えられる。あのようなものが進路・通路にあったら、瞬時随意的移動は困難である。大坂城冬の陣図に見るような鳴子などの補助機能があれば、夜間にも有効だった。

こうした機能は近世城郭にはどう継承されたのであろう。おそらく局所限定的に機能するのではなく、城郭全体で攻撃する敵兵の行動を制約するように変化したのであろう。石垣の発達・水堀の普及そのほかによって、堀底を移動し、そこから斜面を登攀していくこと自体が、近世の城ではありえなくなったと考えられる。

3. 土塀

ひとくちに中世の城というが、中世は長く600年以上ある。この長い時代に武器の革新があった。弓矢から鉄砲である。弓矢の射程距離が60メートル、鉄砲が200メートルというから、射撃能力が4倍近くに強化された。とすると、堀の構造、塀の構造を始め、城郭構造全体に画期的な変更が加わったと推測できる。豊臣期には大筒が使われる。宣教師の報告では、軍船にも大砲が搭載されていた。大型火器に対応できるように、さらに城の変容があった。

堀幅はそれぞれの武器に対応して長くなっていった。しかし百間堀、200メートル近い堀幅を持つ城は、中世はもちろん近世でも少数派・例外であった。塀の幅は確実に厚みを増し、鉄砲以前、弓矢のみを防いでいた薄い板塀は、厚みを持つ漆喰壁の塀に変わって行った。

漆喰塀は厚みによって安全を確保した。厚くなった分、狭間における俯角・仰角を確保するための工夫もされた。かりに塀の厚みが1尺(30センチ)あれば、俯角・仰角あわせて90度よりも広い狭間を確保するためには、ふつうに作るならば、外側に2尺以上の口(口径)が必要になる。このような広すぎる口を避けるために、中心部がくびれて、内側にも外側にも開いた構造にしたものが多い。こうしておけば外径1尺強で上下45度、計90度の仰俯角が得られた。

鉄砲の時代になっても弓も重宝された。柳川立花藩には墨縄と名付けられた鉄砲がある。立花宗茂と黒田長政(福岡黒田藩)が、朝鮮陣において弓と鉄砲の性能を争って、弓矢の(立花)側が勝って黒田側の鉄砲を得物としたといわれる(図録『福岡藩』福岡市博物館)。即時の対応には火縄に頼る鉄砲よりも弓のほうが優れていた。当時の鉄砲は命中率も低く、不安定だったようだ。このことを反映するものか、近世の城壁ではすべてを鉄砲狭間にしたものよりも鉄砲狭間2ないし3に対し、矢狭間を1の割合で混ぜているものが多い。ただし名古屋城深井丸

古写真での清須櫓続塀の狭間は濠幅が80メートルほどあること、つまり弓矢の射程距離よりも濠幅が長いので、矢狭間とみると不審がある。抱え大筒に対応するもの、つまり大筒狭間かもしれない。福岡城上の橋門古写真の三の丸城壁には、石垣直上の鉄砲狭間と壁面中央の大型の狭間が写っている。福岡藩にて使用された抱え大筒は福岡市指定文化財になっている。萩城天主の古写真にも大型の狭間が写っているが、濠幅から考えればいずれも大筒狭間と推定される。姫路城西の丸櫓の長方形の狭間は形状からは矢狭間なのだが、高さが低く、窓までの高さが弓の半分の長さより低いから、弓矢は放てない。熊本城宇土櫓の狭間にも同様のことがいえる。前面の堀幅は広い。姫路城天主の狭間は正方形で、形態からは鉄砲狭間なのだが、射程距離を考えたならば、大筒狭間として機能したものであろう。

鉄砲時代をかりに天正3年(1575)の長篠合戦以降としよう。われわれが目にし、縄張り図作成の対象にする城は、信長以降の天下統一過程で使われたものが多い。おそらく、大半は鉄砲時代の遺構であろう。

現在の姫路城は池田輝政の築城であるが、それ以前にも羽柴秀吉の築城にかかる城があって、天守台発掘調査でも前身遺構として確認されている。さらに、それ以前にも赤松氏・小寺氏・黒田氏の城郭があった。播磨国府後背の山でもあったから、古代には国衙軍にとっては主要な武力拠点であろう。複合遺跡である。

姫路城を歩いて不思議に思ったことがある。井戸郭・通称腹切丸の構造である。姫路城のあった姫山にはもともと中段に緩傾斜地があったらしい。そこに谷地形もあって、井戸が掘られていた。この中間斜面を平坦地にして、姫路城は城内に取り込んだ。さらに石垣を築いた。石垣は垂直に近い壁だから、石垣を築けば、その上部平坦地(平場)の面積は従前より増加する。高石垣が積まれる前の姫路城腹切り丸に平坦地があったとしても現在の方形をなす郭部分よりははるかに狭かったであろう。井戸郭(腹

切丸)の櫓の名を帯郭櫓またその上方の櫓を帯の櫓という。従前は今みるような方郭ではなく带状で帯郭と呼ばれていたようだ。その上下(前後)は急な斜面地があって、そこには豎堀も掘られていたであろう。しかし所詮は帯郭だったから死守するところではない。

総石垣化はこの弱点を強化するものだったが、縄張り上の問題はそのまま継承され、依然として課題が残った。つまり平坦部から、山里丸(太鼓櫓、への櫓)にまで一気に石垣が積み上げられたが、中途の高さの腹切丸は、その石垣高さの中間に位置することになった。

したがって山里丸(太鼓櫓)とそれつづく塀の直下に築かれている石垣を、とにかくよじ登っていくと、腹切り丸の帯郭櫓およびそれに続く塀の屋根よりも高い位置まで上がることができる。ここから塀の上を乗り越えれば、難なく腹切り丸のなかに入ることができる。城外から、いとも簡単に城内に入ることができるのである。

この弱点は現代人も考えつくことらしく、石垣の中途から腹切り丸塀(帯郭櫓に続いている)の上に嚴重に鉄柵と鉄条網が廻らされている(図-9,10)。入場券を支払わずになかに入ろうとする人がいるのかと思ったが、さすがにそんな人はいない。文化財管理の面でこのようなところから安易に部外者に入られては困るという意味での鉄柵であろう。

むろん城の時代にも当然そうした弱点は意識されていたよう。

上の段、太鼓櫓から北に続く塀にある狭間から覗くと、ちょうど帯郭櫓の屋根が見える。当初はなぜ味方の建物を攻撃するのか不思議だったが、そうした外部侵入者・石垣を伝って攻めてくる敵への配慮であろうと考えてみた。

ところがじつはこの狭間から覗くと、腹切り丸建物と石垣の接点が見えない。土塀が厚すぎて真下が見えないのだ。これは欠陥ではなからうか。

本来ならば太鼓櫓に続く塀には石落としを設置しておかねばならない。あるいはこの塀が土塀ではな

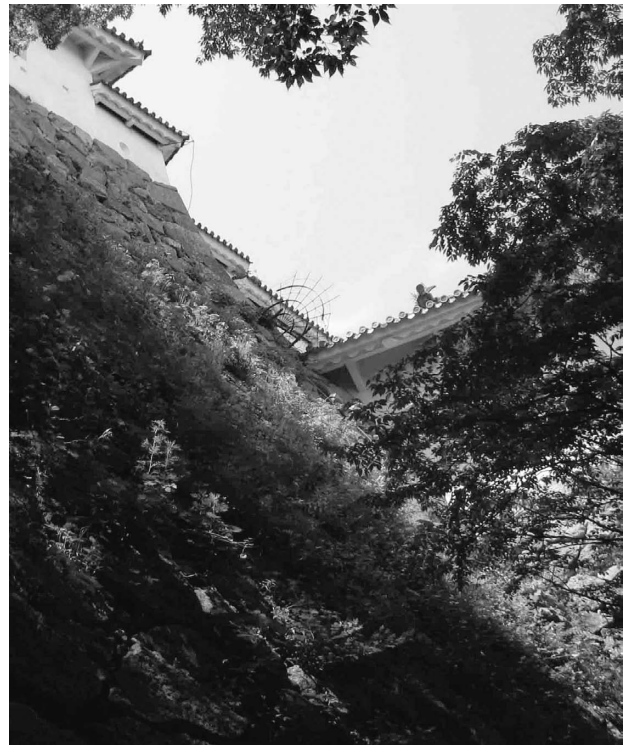


図-9 下は姫路城帯郭櫓続塀、上左は太鼓櫓



図-10 姫路城帯郭櫓、左上が太鼓櫓

く、厚みのない板塀であったのなら、塀からの俯射も可能であったのかもしれない。むしろここぞ柵の方がよかった。そもそも、この石垣の上に厚い土塀を作った意図はどこにあるのか。大砲攻撃に対しては若干の効果があったかもしれないが、これだけの落差・距離差があれば、鉄砲がここまで届くことはなさそうだ。

昭和大修理の報告書(文化財保護委員会・昭和

40年・1965)を読むと、太鼓櫓北方土塀は全般に保存がよいが、「他の土塀に比べて壁体厚が著しく厚い」とある。木枠の残る狭間もなく、漆喰の狭間のみである¹⁾。あるいは明治修理の際に旧状が変更された部分があるのではなかろうか。

この一連の高石垣が構成する一角、太鼓櫓下の「りの門」には「慶長四ねん大工五人」(慶長四=1599)の墨書がある。関ヶ原合戦の一年前であるから、池田輝政入封以前・木下家定時代の遺構である。帯郭櫓の旧地盤近くから赤松政則(応仁2年・1468、姫路城を改修したとされている)使用という鳳桐文瓦が出土して、報告書に写真が掲載されている。中世後期にはこの地盤が形成されていたと思われる。とすれば池田時代を遡る早い時期に石垣化がなされていたのかもしれない。

さて石垣を登る兵はいたのだろうか。激しい射撃のなかを登る。上端が柵であれば城内に入るとは可能であろう。ところがそこには建物(塀・櫓)がある。建物は登れまい。どうすることもできず、進退きわまるように思う。城内に入るとは不可能であろう。しかし慶長の役の蔚山城攻防図(前掲・図-7)を見ると石垣に梯子をかけて登っている兵士が描かれている。梯子の上端まで行ってからどうするつもりだったか。そこに櫓があったとすればむろんのこと、塀であっても、建物は乗り越えられまい。推定可能なのは、(1)蔚山城は未完成であったから、塀には引き倒す手がかりが多くあった(屏風の塀には木舞に見えるものが描かれている)、(2)火薬を仕掛けて、城を崩す戦法を採った、以上の二つである。後者であれば、朝鮮・明にそうした戦術があったことになる。火薬操作には習熟していた。晋州博物館には火薬筒をはじめ、朝鮮・明連合軍が使用した多くの銃が展示されている。石垣自体の破壊は容易ではないから、破壊場所はできる限り石垣の上端、建物の近くが良かった。

中世の城では、いったん土の堀底に入って、土の急斜面を登る戦法があったから、対処法としての障子堀や塹堀が作られた。近世にはそうした戦術はな

くなった。石垣下の堀に誘い込んで集中砲火を浴びせることで対応可能であった。攻城軍もそうした作戦は採らなくなっていた。むしろ新兵器、銃器火薬を使用した作戦への対応が、必要とされていった。

中世の城の建物遺構は残っていないから、さまざまな史料を組み合わせての解釈が必要となる。長い時期にわたって使用された場合、重複する地下遺構は難解である。柱穴であれば、ごく短期間に使用された特殊構造物のみが解釈可能な「明瞭」遺構となる。絵画は、後世のものも多く、想像が含まれていれば史料的価値は落ちる。描かれた状況を正確に把握し、さまざまな視角でとらえなければ一断面の解釈になる。文献も同じである。当事者の記録と、後世人の記述では史料の価値差が大きい。現存する建物遺構はいずれも近世建築だが、機能の継続を考えれば有効な現物史料となろう。その場合にも今日に至るまでの修理があり、改変もある。いずれの「史料」に対しても史料批判が必要となる。

【補註】

1) 姫路城の土塀は、木枠の残る狭間と木枠のない漆喰のみの狭間がある。それぞれの機能差、時代差も考えなければならない。概していえば木枠のほうが古いのではないか。本丸水二の門周辺の角度を持つ木枠の狭間には機能的なものを感じるが、漆喰のみの狭間には西の丸塀など、視野が狭窄で、機機能が希薄なものがある。しかし姫路城には一箇所、両者が連続する土塀がある(ろの櫓と二の櫓間)。折れているが、もしこの一続きの塀が、同時の建築であるならば、二つの異なる狭間に新旧関係はないことになる。ただしここ以外の土塀は木枠を使用するか、漆喰であるかのいずれかで統一されている。姫路城の塀は狭間の構造からいって二時期あると見る方が自然である。